
ピタゴラスちゃんのジレンマ

伊吹 由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピタゴラスちゃんのジレンマ

【Nコード】

N1365Z

【作者名】

伊吹 由

【あらすじ】

聖フィロソフィー学園・・・通称・テツ学。最近男女共学になったこの学園では、あらゆる生徒が哲学を中心に勉学に励んでいる。主人公のピタゴラスちゃんは、恋する乙女。勇気をふりしぼって、憧れの男子生徒にラブレターを届けようとするが・・・不可思議なミステリーに遭遇する。同じ倶楽部のデカルトちゃんやラッセルちゃんと共に、そのミステリーに挑むのだが・・・事態は思いがけない方向へと進んでいく。数学、物理、化学・・・全ての学問は哲学に通ず。実際の哲学論理的思考あり、哲学バトルあり、推理小説の

ような謎やどんでん返しあり・・・真実を証明するには？神は存在する？因果律とは？あらゆる哲学的要素を盛り込み、ピタゴラス達は困難に立ち向かう。そして彼女たちが行きついた先に見たものは・・・？

第1話 始まりはラブレター（前書き）

【哲学的な彼女】という企画に投稿を考えている作品です。この企画の要点は2つだと個人解釈。1つは「哲学に萌えを」（これ、企画側的には大事な点らしい）。そしてもう1つは哲学を知らない人が、「ふーん、哲学ってこんなものなんだ」と、入り口的な物が見える点。個人的には古代や近代あたりが好きですが、時空を超えてあらゆる世代の哲学者を登場させ、謎解きあり、哲学的論理解釈あり、バトルありという形で書いていきます。最後の最後には、多くの科学者が議論している1つのテーマを元に・・・推理的トリックを用意してますので、推理小説が好きな方は謎解きに挑戦してみてください。

第1話 始まりはラブレター

～ 第1話 始まりはラブレター ～

3月14日。

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

ピピピピピピ・・・

「は!?!」

一気に目が覚めた。鳴り響く目覚まし時計を見ると・・・午前6時。

「・・・」

なんかやけに・・・リアルな夢を見ていたような・・・?

「・・・」

目覚ましを止め、夢の内容を思い出そうとするが・・・思い出せない。

「そうだ！」

この日は、私・・・ピタゴラスにとって、大切な日。

・・・。。

いつもよりかなり早く起きた私は、午前7時前の誰もいない学園に登校した。

そして今・・・

ある靴箱の前に立っている。

「きよ、今日こそ・・・このラブレターを・・・
ルブラン君に・・・」

そう。私は今日、あこがれの男子生徒にラブレターを届ける。そのため、ほぼ徹夜でラブレターを書いた。1時間しか寝てないが、眠気はない。

「・・・」

直接渡す勇気なんてない私は、定番中の定番【靴箱にラブレター作戦】を決行するというわけだ。

「・・・」

学校の靴箱は、みな扉がついている。だからラブレターを入れて、扉を閉めちゃえば・・・誰かにそれを見られる心配はない。

「・・・」

右手でギュッとラブレターを握りしめる・・・自分でどんな内容を書いたか、今は覚えてない。見返すと、届ける勇気が削そがれちゃいそうで・・・

「こういうのは・・・勢いが大事よね。

見直しなんかせず、私が思ったありのままの・・・

愛の言葉で・・・」

ラブレターを握りしめたまま、しばらく靴箱の前でたたずむ私。この土壇場に来て・・・

トクン トクン・・・

心臓が高鳴り、行動を起こせない。

「このままじゃ・・・誰か来ちゃう・・・」

髪につけたアクセサリーの三角定木を、左手で握りしめた。1：2：
√3の方。

「・・・」

30度を握ると・・・少し落ち着きを取り戻す。

「よし！」

勇気を振り絞った私は靴箱の扉を開け、ラブレターを押し込めようと・

「!？」

したその時だった。靴箱の中に・・・

【ルブラン君へ】

そう書かれた手紙が1枚、入っている。

「ラ、ラブレター!？」

ハートマークのシールが貼られた、ピンクの封筒。どう見てもラブレターにしか見えないそれを見て・・・

「だ、誰が・・・？」

私は呆然とした。

(第2話へ続く)

第1話 始まりはラブレター（後書き）

次回予告

謎のラブレターを手にとった私。その内容を盗み見た・・・
そしてこのラブレターを書いたのは・・・？

次回 「 第2話 数学ガール？」

第2話 数学ガール？（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・

その靴箱の中に、何者かのラブレターが！？

第2話 数学ガール？

第2話 数学ガール？

「・・・」

靴箱の中を覗き込みながら、私は思う。

「ありえない・・・」

私は昨日・・・最後に学校を出た。警備の人が出入り口の力ギを閉める直前まで、私は目の前の靴箱に三角定木をあてている。

ルブラン君がラブレターに気づいた時、最もインパクトを与えるため・・・

【靴箱とラブレターのサイズは、どんな【比】であるべきか？】

この問題を必死で考えていた。

「あの時は、上履きしかなかった・・・」

このラブレター、昨日はなかった。だとしたら今日・・・

「私より、早く来た人が・・・？」

リン・・・ ゴーン・・・ カーン・・・ ゴーン・・・

7時ちょうどチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「!？」

学生用入り口が開いて、誰かが入ってきた。

「カントちゃん・・・」

【近代組】の彼女は、必ず同じ時間の7時ちょうどに登校してくる。

「ど・・・」

パニックった私。靴箱の前で、あたふたとする。とりあえずカントちゃんに見えないよう、身をかがめた。

「あらゝ こんな朝早く、珍しいわね・・・ デカちゃん」

1つ向こうの靴箱で、カントちゃんの声が聞こえる。

「ど、どうしよ・・・」

私は思いがけず・・・

「・・・」

靴箱に入っていた、何者かのラブレターをわしづかみにした。

「・・・」

慌てて靴箱を閉めると・・・カントちゃんに見つからないよう、足早にその場を立ち去る。

「・・・誰が・・・？」

主のわからぬラブレターを握りしめ、自分の教室【古代組】へと走って行った。

・・・。。。

教室にカバンを置いたあと、トイレへ駆け込む。誰もいない個室に入ると・・・

改めて

【ルブラン君へ】

と書かれたラブレターを凝視した。

「・・・。」

裏を見ると

【from □】

そう書かれている。【□】？ 何？ なんて読むの？

「・・・。」

封を開け、中身を取り出した。中にはたった1枚、真ん中2つ折りの便せんがあるだけだ。

「・・・」

人のラブレターを盗み見る事に抵抗はあるけれど・・・

「・・・」

私はそれを広げ、読み始めた。

~~~~~  
愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。  
もつとあなたの・・・近傍きんぽうに入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・  
限りなく近付いていきます。

メールアドレスを教えてください・・・  
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。  
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？  
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P . S .

あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・  
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

~~~~~

「・・・」

そのラブレターを見て、呆然とする。

「なんて、センスのいい・・・」

そして・・・

「これならルブラン君を・・・落とせる」

心からそう思った。と、同時に確信する。

「手紙の主は・・・」

数学倶楽部の人間だ・・・間違いない。

ライバル
恋敵は・・・

私の所属するクラブにいる。

(第3話へ続く)

第2話 数学ガール？（後書き）

次回予告

手紙の主は、私の所属する数学倶楽部にいる。
そう確信した私は、授業が終わった後・・・部室を探ってみた。

次回 「 第3話 数学倶楽部 」

第3話 数学倶楽部（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部に違いない。

第3話 数学倶楽部

第3話 数学倶楽部

午後3時。

最後の授業終了を告げるチャイムがなった。ショートホームルームを終えた私は、すぐに部室へと向かう。

【数】

【学】

【倶】

【楽】

【部】

部室の前にある、古びた立て看板。それを横目に勢いよくドアを開け、中に入ってしまった。15畳はある、まあまあ広い部屋。

「・・・」

部員は結構いるはずだが、9割以上は幽霊部員。入り口に入っすぐの壁には・・・数学倶楽部の部員が書いた、書き初めが貼られている。

【人間は、考える葦だっぴょん♪】

1番手前にあるのは、顧問であるパスカルちゃん先生の言葉だ。その横に、部員の言葉が続く。

【前に進んでるって？ 嘘、嘘！】

【我思ふ、ゆえに我萌え〜】

【万物の根源は・・・ 水であるけー】

【ナマギーリ女神の、おかげです】

【ひとなみに、おごつてよー】

正直言つ。私はこの【ひとなみに・・・】の作品、大嫌いだ。

【神。お前はもう、死んでいる】

【余白が少なねーってば！！】

【いまいましいフレンチマドモアゼル！】

【みんなの幸福の総和が、大きくなりま

用紙に入りきれてない。

【3 , 2 , 1 ! ラッセル ♪ ラッセル ♪】

【天ではない、地が回っているのだ！】

・・・

このような己の言葉を書道作品にしたものが、卒業生も含め50枚ぐらいある。

【3 ^ 2 + 4 ^ 2 = 5 ^ 2】

私は自分の作品を見ながら推理した。

「ラブレターの主は・・・」

学園の窓から見つめていると言っていた。

ならば卒業生は、犯人じゃない・・・」

私は自分も含め、在校生の作品を眺める。

「ちょうど20枚。その中に犯人が・・・」

いつの間にか私は・・・あのラブレターの主を【犯人】と呼んでいた。

部室の中をさぐり、何か犯人に繋がるものがないかを見て回る。でも・・・

「この部室。基本、紙と鉛筆と本しかないのよね・・・」

あとは、真ん中にテーブルが2つ。その周りに椅子が数脚あるだけ。本は結構あるけど、全て数学書。数冊の本を手に取り、パラパラとめくるが・・・

「・・・」

犯人に繋がるようなものは、見つけれられない。簡素な部屋ゆえ、部屋の中の搜索はすぐに終わった。

「・・・」

犯人の手がかりは得られず、三角定木で頭をポリポリとかく。1：
1：√2の方で。

キーン コーン カーン・・・

校内放送だ。

【昨夜、校舎の屋上に小さな隕石が落下しました。

一部、金網に破損がありましたので、現在修復中です。

修復作業が終わるまでの間、全校生徒の屋上への立ち入りを禁じます】

キーン コーン カーン・・・

「・・・」

そう言えば昨日・・・何とか流星群の隕石が屋上に落ちたって、誰か言ってたな。まあ、私は星には興味ないけどね。

そんな事思っていたら・・・

数少ない部員が入ってきた。

(第4話へ続く)

第3話 数学倶楽部（後書き）

次回予告

部室に現れたのは、同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃん。

この日の数学倶楽部では、【集合論】を専攻しているラッセルちゃんの講義。講義の途中、4人目の人物が部室に入ってきた。

次回 「第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん」

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部にいると確信し、部室を探してみた。

でも、何も手がかりを得られず・・・

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん

部室に入って来たのは2人。

「はわ？ Pちゃん。今日、早いですね」

私の事を【Pちゃん】と呼ぶのは、【近代組】のデカルトちゃん。

「おろ？ ピタ子。教団の集会、今日はないの？」

そして【ピタ子】と呼ぶのは、【現代組】のラッセルちゃんだ。

・・・。

ここで簡単に・・・私から2人を紹介しておこう。まずはデカルトちゃん。【TRUTH】と書かれたバッグを持ち歩き、ポニーテールを水色のリボンで止めている。そんな彼女は・・・

校内1の遅刻魔で有名。

「無理して起きたら死んじゃうもん」

が、口癖の基本ワガママっ子だが、何故か校内にファンクラブもあるほど人気度は高い。ついでに言う・・・非常に疑り深い子で、何か気になる事があれば

「ない・・・絶対とは言えないから・・・

意地悪な悪霊さんに、ダメされてるから・・・はわわ・・・」

とにかく疑えるものは疑ってかかる。【これは疑えないだろう】って事に関しては【悪霊】が登場する事になるらしいけど・・・ちょっとイタイ子？ その【悪霊】の前では、全てが疑う対象となるらしい。

「疑う事は萌え」

未だに理解出来ないが、彼女にとって【疑う】事は【萌え】に繋がるらしい。あと正直言っけど・・・

「でもね。デカちゃん・・・

疑ってる自分、すなわち萌えの自分だけは・・・

絶対いるのよね」

自分の事を【デカちゃん】というのに、ちょっとイラッとくる。とりあえずデカルトちゃんの紹介はこの辺で。ラッセルちゃんの紹介は・・・後でね。

・・・。

「今日もデカちゃん、遅刻しちゃいました」

「また？ デカ子、出席日数ヤバくね？」

ラッセルちゃんは、デカルトちゃんの事を【デカ子】と言う。

「・・・」

「そうなんです。」

デカちゃん、出席日数微妙なんです。」

はわわ……」

1つ確かな事がある。

デカルトちゃんは犯人じゃない。手紙の主は私より早く登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れている。

あれ？ でも待つてよ……？

「デカルトちゃんさ。」今日の朝……学校来てなかった？」

「はわ？ 無理して起きたら死んじゃうもん。」

出た。

「今日もデカちゃん。超遅刻です……！」

いや、そこで胸を張られても。

「でも私……」

朝、靴箱のところでカントちゃんが言ってたの、聞いたわ……

【こんな朝早く、珍しいわね。デカちゃん】って……」

確か……そう言ってたわよね？

「デカちゃん、今日起きたの・・・12時ちょうどです。
学校来たのは、お昼の2時ですから」

今、3時過ぎだけど・・・何しに学校来たんだ、この子？

「あのさ・・・僕の推理が正しければ・・・」

ラッセルちゃんは、自分自身の事を【僕】と言う。

「多分、僕と同じクラスのハイデガーちゃんの事だと思うよ。
彼女、【デガちゃん】って呼ばれてるし」

なるほど。

「そうか・・・私の聞き間違えね。

デカちゃんじゃなくて、デガちゃんだったのね・・・」

まあおかげで・・・

朝が苦手なデカルトちゃんは、真っ先に犯人候補から除外された。

一方、ラッセルちゃんは・・・

「さあ、今日は昨日の続き・・・僕が集合論の基礎、教えるからね
」

あの手紙の主の可能性はあるのだろうか？

・・・。。。

では、ここでラッセルちゃんの紹介。

何を隠そう、数学倶楽部の部長。ミニスカ+ヘソ出しルック・・・ちよつと時代遅れな感はあるが、ツインテールの元気な女の子。かの天才アインシュタインちゃんとも仲が良く、校内でも随一と言われるほど豊富な知識を持っている。

部長は集合論を研究してるらしく・・・ここ最近の数学倶楽部では、毎日部員相手に集合の話をしてきている。もつともそれを聞くのは、私とデカルトちゃんの2人だけ。あとは幽霊部員だし。

いっけんしつかりものの部長だが・・・まあ、その本性は次のエピソードで解る事になるでしょう。

・・・。

「はわわ　　昨日の【空集合】は難しかったです」

「集合論はロジックとも密接につながってるんだから。

デカ子、論理的に【神の存在】を証明したいんでしょ？

じゃー、ちゃんと学ばなきゃダメよね」

集合論を学ぶ事は、哲学を学ぶ上でとても大事だと部長は言う。私達にゲーデルちゃんの【不完全性定理】まで教えると言っているんだけど・・・正直難しいのよね、集合論。でもこれらを学ぶ事は、哲学的にも大きな意義があるんだって。

私は哲学者として成長したいから・・・難しくて頑張って勉強す

る！

ちなみにこの【集合論】は数学の世界でも割と新しい研究分野らしく、聖フィロソフィー学園の中でも【現代組】の子達しか学んでいない。

果たして【古代組】の私と、【近代組】のデカルトちゃんに理解出来るのかしら？

昨日の部長の講義で、【部分集合】と【空集合】について学んだ私達。

「昨日習った・・・

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】。

私も、そこがよくわからなかったわ」

空集合というのは、中身が空っぽの集合の事なんだけど・・・そんな集合考えて、意味あるのかしら？

まず【 x が集合 A に属する】 $\downarrow$ x は集合 B に属する】が成り立つとき、 A は B の部分集合という。

例えば、

$$\begin{aligned} A &= \{1, 2, 3, 6\} \\ B &= \{1, 2, 3, 4, 6, 12\} \end{aligned}$$

という2つの集合の場合、 x が A に属している（この場合、 x は1, 2, 3, 6のどれかになる）ならば、その x は B に属している。だから、 A は B の部分集合なのだ。

「それはわかるんだけど・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】と部長は言う。

「だったら・・・」

【 x が空集合に属するならば、 x は全ての集合にも属する】・・・

それが成り立って事よね？」

「そだよ」

即答する部長。

「でも、空集合って・・・中身空っぽなんだからさ・・・

x が空集合に属するって・・・おかしくない？」

「デカちゃんも、そこ・・・よく、わからなかったです」

「OK。じゃあ、今日は集合とからめて、論理の基礎を教えよう」

私達はテーブルの周りに座った。

「まずは・・・」

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

って、命題あったとするわよ？」

命題というのは【正しい】か【正しくない】かが、ハッキリとしている文章や数式の事。

あらゆる真理探求命題の真偽を議論するのも哲学の1つ。例えば命題【神はいる】とかね。

あ！勘違いしないでよ。命題【神はいる】ってのは【神がいる】事を、必ずしも言ってるわけじゃないの。命題ってのは【正しくない】とハッキリわかってる事に対しても言っんだ。だから【 $2+3=100$ 】のように、完璧間違っている事も立派な命題なのだ。

一応私達の認識では【神はいる】か【神はいない】かの2択でしょ？
なので神がいても、いなくても・・・【神はいる】は命題の1つなの。
の。

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

部長は紙にその命題を書き、テーブルの真ん中に置く。

「デカちゃん、ケーキ、大好きです」

「いや、例えだから・・・で？ 部長、続きを」

「ケース1。」

デカ子が100点とった。そして僕がケーキおごった。

この時この命題は・・・正しい？ 正しくない？」

「それは正しいです。100点とったんだから」
デカちゃんがケーキごちそうになるのは、当然です」

「ま・・・疑う余地はない。正しい」

「正解。じゃあ、ケース2。」

デカ子が100点とったのに・・・僕がケーキをおごらなかった。

この場合、この命題は正しい？」

「それは間違ってます」

「うん。100点とったらケーキおごるんだから・・・
100点とったのに、おごらないのはおかしい!!」

だからこの時、命題は・・・正しくない!!」

「OK! ではケース3。」

デカ子が100点とらなかったので・・・僕はケーキをおごらなかった。

この時、命題は正しい？」

「正しいです」

「うん、私も正しいと思う。」

100点取れてないから・・・ケーキもらえないのは当然」

「よし! 今のトコ、全て正解・・・ではラスト! ケース4!

デカ子が100点とれなかったのに・・・僕はケーキをおごった。

この時、命題は正しい？ 正しくない？」

「これは・・・正しくないです」

「私も正しくないと思う」

ガラリ！！

その時・・・部室に入ってくる人物がいた。見覚えのない顔・・・誰？

「ラ・・・ラマヌジャンちゃん！？」

部長が裏返った声をあげる。ラマヌジャンちゃん？

「あら・・・ラッセルちゃん」

名前、聞いたことある。確か部長と同じ、【現代組】の子だ。肩まで伸びた真っ黒な黒髪と、大きなクリツとした黒い目。見た目からして、インド出身だろう。何となく、神秘的な魅力がある。

「な・・・何故、ここへ？」

そして数学倶楽部の・・・幽霊部員の1人でもある。

「ただ・・・私の本を取りに来ただけ・・・」

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおこる】

「・・・・・・・・」

ラマヌジャンちゃんが、部長の書いた命題をじつと見つめた。

「あ、デカルトちゃんが100点取らなかった時にね・・・
部長がケーキをおごったら・・・この命題は正しいかって話をしたの。」

私とデカルトちゃんは、正しくないって思うんだけど・・・」

「絶対正しくないです」

命題は正しくないという私とデカルトちゃんに対し・・・ラマヌジャンちゃんは、首を横に振ってこう告げた。

「それ・・・正しいわよ・・・」

「え？　嘘・・・」

「はわ？」

思わず声をあげる私達。

「何で・・・？　100点取ったらケーキおごってもらえるなら・・・」

100点取らなかつたら、おごってもらえないでしょ？

なんでこの命題が・・・その時、正しいって言えるの？」

「わかるの。ナマギーリ女神のおかげで・・・」

「え？」

「はわ？」

そう言うトラヌジャンちゃんは、ニッコリと優しい笑顔を見せる。

いや・・・笑顔はステキだけど・・・ な、何？ナマギーリが何と
かって？

部屋の奥の方へ行ったトラヌジャンちゃんは、数冊の本を手に取り
と・・・

「それじゃ・・・私はこれで・・・」

そのまま笑顔で、部屋を出て行った。

「・・・」

「はわわ・・・」

彼女が出て行く姿を呆然と見つめていた私達。

「なんだか・・・ 不思議な子ね・・・」

閉じた扉を見ながら、私は呟いた。

「まあ・・・天才と何とかは、紙一重らしいからね。
僕にもあの子は・・・イマイチわかんないだね。」

そう言えば、ラマヌジャンちゃんは・・・かなりの天才肌だって聞いた事ある。

「はわわゝでも、ホントにラマヌジャンちゃんの言う通りゝ
デカちゃん100点とらなかったのに、ケーキをおごってもら
って・・・」

この命題が正しい事になるんですかゝ？」

「私も・・・信じられない・・・」

半信半疑の私達に、部長はきっぱりと言う。

「うん。正しい」

え！？ ホントに！？

「論理の世界では正しいんだ。こう考えるといい。
例えばデカ子が99点取った。そこで僕はこう言う。

【100点じゃないが、よく頑張った！ だからケーキをおご
ろう！】

どう？ そういう成り行き、割と自然じゃない？」

「自然ですゝ ケーキ、欲しいですゝ」

「うゝん・・・それは自然に思えるけど・・・」

「いい？」

【デカ子がテストで100点とったならば・・・】という命題。

これは100点をとった時の事を言ってるだけで・・・」

「うん・・・」

「100点を取れなかった時の事は一切言っていない。
デカ子が100点取れなかった時・・・

僕がケーキおごっても、この命題を否定している事にはならない
の」

「なるほどです　デカちゃん、わかったです」

「・・・」

デカルトちゃんは納得してるようだけど・・・私は・・・

「結論。【pならばq】という命題を考える場合・・・
前提pが正しくないとき、qが正しくても正しくなくても・・・

命題【pならばq】は、正しい事になるのよー！」

$$p \mid q \mid p \rightarrow q$$

$$\begin{array}{c|c} T & T \\ \hline T & T \end{array}$$

$$\begin{array}{c|c} T & F \\ \hline F & F \end{array}$$

F	T
F	T

部長はこんな表を書いた。

「これ、真理値表しんりちって言うんだ。

Tは【TRUTH】で、【真】って意味ね」

「デカちゃんのバッグにも、【TRUTH】って書かれています」

「そうそう。まさにそれ！ 【真実】とか【正しい】って意味。

Fは【FALSE】。もちろん【偽】【正しくない】って意味ね」

「うーん・・・」

しかめっ面の私。

「はわわ。確かに【p】が【偽】の時、 $【p \downarrow q】$ は2つとも【真】です」

「だから

【xが空集合に属するならば、xはどの集合にも属する】ってのはさ・・・

前提の【xが空集合に属する】がすでに間違ってるから・・・
この命題自体は正しい事になる！」

「むむむ・・・」

まだ微妙な理解の私。

「ゆえに【空集合は全ての集合の部分集合である】ってわけ！
ん」。 Q・E・D・ね」

「デカちゃん、わかったです」

「う、うん……」

論理は難しい。

こうして……

この日の部長による【集合論講義】は終わった。何となく解ったよう
な、解らなかったような……

「ピタ子さあ、今日もブラジャーつけてるよね？」

講義を終えた部長が、私に声をかけてきた。

「え？」

さっきも言ったけど、私の事を【ピタ子】と呼ぶんだけど……

「デカ子のブラジャーは認めるけどさ」

デカルトちゃんは【デカ子】と呼ぶわけで。

「……」

つい、自分の胸を覗き込んだ私。明らかに……

胸の大きさを【デカ子】【ピタ子】と呼んでいる。失礼な！

ここだけの話、ラッセルちゃんの胸は・・・

ペタンコだ。

「僕、思うんだけどさ。ピタ子に・・・ブラ、必要ないよ？」

胸がつるぺたで、自分を【僕】と称するので・・・時々、男の子に間違えられる部長。本人は男の子と間違えられる事をすごく嫌うので、そこをイジったりはしないんだけど・・・

「あのね、部長。前も言っただけど・・・

私・・・こう見えても、Bはあるんだから・・・」

思わずそう言ってしまった私。だってラッセルちゃんよりは胸あるのよ！これは真実！！

「こう見えても？ 見えてないけど？」

出た。この言い方は彼女の作戦の1つ。

「ぐ・・・だ、だからそれは・・・ 例えであって・・・」

わかってはいるんだけど・・・

「ピタ子、【見えても】と仮定しているのに・・・

見せないって事？」

いつも、ラッセルちゃんの術中にハマってしまう私。

「そ．．．それは．．． そうよ．．．」

「見せないんならさ．．．」

【こう見えても、私はHカップ】とでも言えるじゃん!」

なんていうか．．． 人の揚げ足をとるのが絶妙なよ、部長は。

「そ．．． そりゃ、そうだけど．．．」

「つまり本当はAでも、Hだと言う事が出来る．．．
見せないこと前提なら．．． 何でもありじゃん!」

「う．．．」

言い返せない私。後で知る事になるんだけど．．．これは昔の哲学者の常套手段、【詭弁^{きへん}】というものらしい。

「結局はさ。ブラを脱ごうとしないってわけよね?」

「う．．．」

始まった。

ラッセルちゃんは．．．1年前、通称【ブラパラ事件】を起こした張本人。いわゆる【ブラジャー・パラドックス事件】。この事件は、彼女の集合論的パラドックスの追求による結果起きたらしいんだけど．．．

説明すると話が長くなるので、この事件の詳細は【番外編？】に預ける。

「きよ、今日はスポーツブラだから・・・」

「えゝ・・・ハズし甲斐ないゝ。なっせるゝ」

なっせる？

明らかにテンション下がった部長はちよつと落ち込んだ後、私を見た。いや・・・私の胸を見た。

「じゃあ、スポブラの先に豆つけたら？

おっぱい、大きく見えてセクシーになるよ！」

私が豆、大嫌いなのを知ってて言ってる。ここでカッとなったら、またさっきの繰り返しだ。

「豆つけたら・・・ラッセル、ラッセルゝ」

とにかく彼女は下ネタが大好き。あと、オヤジギャグも。てか、中身はただの【エロセクハラ中年オヤジ】だと断言していい。

数学や哲学やってる時は超真面目なんだけどなゝ。

「・・・」

私は思う。このエロオヤジが、あんなセンスのいいラブレターを書いたなんて・・・まず、ありえない。そうとなれば・・・

「ねえ。あなた達・・・」

私はテーブルの上に・・・

「ちょっとコレ・・・見てくれる？」

あのラブレターを置いた。ひと癖もふた癖もある連中だが・・・

「はわ？」

「何？」

この数学倶楽部で、数少ない毎日顔を見せる部員。

「コレ、誰が書いたか・・・わかるかな？」

そして、頭はキレる子達だ。

「はわ？ ラブレター？ いやいや・・・

これがラブレターとは・・・簡単には信じないです」

何かの罰ゲームの可能性もあります」・・・」

私は中から便せんを取り出し・・・それも広げて見せた。

~~~~~  
愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。  
もっとあなたの・・・近傍きんぽうに入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・  
限りなく近付いていきます。

メールアドレスを教えてください・・・  
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。  
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？  
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・  
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P.S.  
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・  
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

~~~~~

「有界名閉集合にして、この文章センス・・・」

「部長、何言ってるの？」

「コンパクトなのにセンスがいいって言うてるの！
まあ、僕ほどじゃないけどね」

「・・・」

部長のギャグには、センスのかけらもない。

「玄関の前で、コレ落ちてるの見つけてさ……」

私は嘘をつく。愛のためなら、嘘だって平気。

「落とし主に、返してあげたいんだけど……」

これも嘘。私以外に誰がルブラン君を狙ってるから知りたいだけ。

「だからコレ……誰が書いたと思う？」

こうして……数学倶楽部に所属する私・ピタゴラスと……

「デカちゃん的には、まずは部員、全員を疑ってみる！
手紙の主は……」

あなたよ！Pちゃん！」

朝が弱く、疑り深いデカルトちゃん。そして……

「僕が犯人？　ち！　バレちゃしょうがない……
どうせ有罪は確定だ。それならば……」

お前のブラを頂く！」

私のド下手な物真似をする部長。すなわちエロオヤジのラッセルちゃんの3人で……

「おら！ デカ子！ 僕にお豆を見せなさい」

「はわわゝ（笑）」

このラブレターの主を探し出し・・・

「あまいわ！ ラッセルちゃん！

デカちゃんが、女の子と信じているようだけど・・・

果たして真実かしら！？」

そしてその子が【犯人】である事を証明するため・・・

「そんなの・・・ブラを頂けば、解ること！」

「それはどうかしら！？ 仮におっぱいがあつたとしても・・・
意地悪な亡霊さんに、ダメされてないかしら！？」

動き始めた・・・

のか？

（第5話へ続く）

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん（後書き）

次回予告

1年前に起こった、【ブラジャー・パラドックス事件】。

これはラッセルちゃんの、集合論的パラドックスを追求する事がきつかけで起こった。最初の犠牲者はカントールちゃん。

そして・・・

次回 「番外編？ ブラジャー・パラドックス事件」

番外編？ ブラジャー・パラドックス事件（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
番外編？ ブラジャー・パラドックス事件

番外編？ ブラジャー・パラドックス事件

今から約1年前・・・

その事件は起こった。

【現代組】所属のラッセルちゃん。昔から自分より胸が大きい子を見ると、ブラジャーをハズしたくなる衝動に駆られる子だった（これは本人も認めている）。

ある日彼女は

【自ら^{みずか}ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

の存在について考えてみたらしい。そして、本人曰く

「僕も【自らブラを脱ごうとしない子の集合】に属している」

との事。そうすると、どういう事が起こるか？

「僕はブラを脱ごうとしない女の子から、強引にブラをはぎ取るから・・・」

自らブラを脱ごうとしない僕自身の、ブラもはぎ取らなければいけない。

でも、そうすると・・・自らブラを脱いでいる事になってしまい・・・

まさにパラドキシカル！！」

・ 自己存在のパラドックスに直面した彼女は興奮し、あるうことが・

【自ら^{みずか}ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

を【実践】する事を決意。本人曰く、それも立派な哲学的実践だと・
・・・？

とはいえ、そのためにやるべき事といえば・・・

明^{あき}かた^ひだ。

最初の犠牲者は、同じクラスのカントールちゃんだった。ラッセルちゃんは彼女に・・・

「ねえ、ブラとって」

と言った。

「は？ 何言ってるの？ 嫌に決まってるじゃん！」

というカントールちゃんの返しに対し・・・

「ふ・・・ 自らブラを脱ごうとしないわけね・・・」

ニヤリと笑ったラッセルちゃん。カントールちゃんの背中に忍び寄り・・・

「3-1-」

彼女のブラホックを、一瞬でハズしたかと思うと・・・

「2!」

まるでマジックのように、ブラジャーをはぎ取った。

「1!」

目撃者の証言によると、ラッセルちゃんは奪い取ったブラを高々と持ち上げ・・・

「ラッセル、ラッセル」

と、勝利の雄叫びをあげていたそうだ。

「これで私は、パラドキシカル! ラッセル、ラッセル」

ついでに彼女は・・・どんなブラも、3ステップでハズせると豪語している。そんなスキル、人生で有用か？

こうして・・・

彼女自身、パラドキシカルな存在になりたいがため・・・

クラス中の女の子を巻き込んだ【ブラジャー・パラドックス事件】、通称【ブラパラ事件】が勃発。

この事態を収拾しようと動いたのが、同じクラスの学級委員長・ヒルベルトちゃん。

「は？ ブラはずせ？ あなた、気は確か？」

そんなクラスの秩序を乱す生徒の言う事が聞けるとでも？」

矛盾のない完全なクラス体系作りを目指していた彼女も・・・

システム

「自らブラをハズす気・・・無いわけね・・・」

「当たり前でしょ！ 完全な・・・」

「3！ 2！ 1！」

言わずもがな。2人目の犠牲者となった。

「ラッセル♪ ラッセル♪」

そしてクラスの女子達は、次々とラッセルちゃんの毒牙にかかる。

「ブラとって！」

の要求に対し

「いや！」

と言う女子のブラをはぎとっては

「ラッセル♪ ラッセル♪」

勝利宣言と同時に、ブラを高々と持ち上げる。パラドックス以前に、もはやただの変態だ。

「ブラとつて！」

このラッセルちゃんの理不尽な要求に・・・

「いいわよ」

唯一「Yes」と言ったのが、ラマヌジャンちゃん。彼女・・・論理は通じないが、超のつく天才肌で、あらゆる公式を見つけるのが得意な子らしい（ラッセルちゃん情報）。

「じゃあ、取るね」

というラマヌジャンちゃんに対し

「あ！ 待って！ いい！ あんたじゃ、パラドキシカルに反する
！！」

初めてうるたえたラッセルちゃん。矛盾に反するというのも、変な話だけど？

こうして・・・

ラマヌジャンちゃんを除く【現代組】の女子全て・・・ラッセルちゃんの犠牲になった。

「ラッセル ラッセル」

やがて【現代組】の女の子達だけでは飽きたらず・・・他のクラスの女の子を標的にし始める。

・ 【古代組】に侵入したこのテロリスト・・・いや、エロリストは・・・

私と^{あいたい}相対した。

「・・・・・・」

ラッセルちゃんは私の胸をじっと見つめた後、こう言った。

「ブラ、必要？」

これがラッセルちゃんにかけられた、最初の言葉。

「は！？ Cあるから！！」

そしてこれが私からラッセルちゃんにかけた、最初の言葉。

「C？」

「あ・・・ホントは、B・・・プラス・・・
Bプラスよ！ 四捨五入してCよ！！」

「Bプラス？ それ以前にさ・・・ おっぱいに、四捨五入ってあるの？」

言うなれば、四捨五乳ってか？ ラッセル、ラッセル」

（「な、何よ・・・ この子？ 人のおっぱいをネタにして・・・」
）

ラッセルちゃんの目がキラリンと光ったかと思うと・・・

「ぶっちゃけ言っけどさ・・・ Aでしょ？」

自信満々でそう言ってきた。

「は！？ Bあるし！！」

「じゃあ、ブラとってよ・・・」

「はあ！？ 頭おかしいんじゃないの？
なんで、ブラとる必要があるわけ？」

「ふむ・・・じゃあ、あなた・・・」

この当時はお互い名前も知らない。

「自ら、ブラを取ろうとしないわけね？」

「あ・・・当たり前でしょ！？」

あんただって、ブラ取りなさいって言われたら・・・

取らないでしょ！？」

「うん」

あの時の嬉しそうなラッセルちゃんの顔は・・・忘れたくても忘れられない。嫌な意味だね。

「3・・・」

「？」

ラッセルちゃんは、突如・・・

「2・・・」

カウントダウンを始めたかと思うと、私の背後に忍び寄り・・・

「1！ ラッセル♪ ラッセル♪」

瞬殺でブラホックをはずし、ブラジャーをはぎ取った。

「き・・・ きゃー！！」

この後、どうなったかって？

私の口から言いたくないし、言えるわけがない。それは読者の想像に任せる事しておく。

・・・。。

事件から数日後。私は数学倶楽部に入部するため、部室を訪れた。
そこでラッセルちゃんと再会する。

「お？ 古代組の・・・ えっと・・・」

彼女は私の胸を見て、何かを思い出した。

「そうだ！ ピタ子！ 【古代組】のピタ子だ！！」

正真正銘のピタ子だ！」

いや・・・ そんなピタ子ピタ子、言わなくても・・・

「・・・」

あんだだっ、胸ピタコンじゃん。私は失礼かなと思って、触れないでいるのに。

「すでに証明済みだもんね。ラッセル ♪ ラッセル ♪」

このセリフから、ブラをハズされた後の事を・・・少し想像できるだろう。

前述したけど、ラッセルちゃんはつるぺたぴったんこ・・・学校1の貧乳だ。

【自分より胸が大きい子のブラをハズす】□【学校1の貧乳】〃【無差別エロ】

【□】は、【かつ】と読む。

この命題における等式は、【現代組】で【ラッセルの法則】とよばれている。【ド・モルガンの法則】よりも明かで、本人以外周知の公式なんだって。まあ、集合論は【現代組】しか習っていないから、

私にはあまりわからないけど。

そんなつるぺたびったんこのラッセルちゃんに・・・

「ラッセルちゃんこそ、間違いなくブラいらないから」

なんて言おうものなら・・・

「あなたこそ、ブラ、必要なの？」

となり、あの事件の繰り返しになってしまふ。そんなラッセルちゃんが・・・

数学倶楽部の部長だったのには驚いた。

「僕、集合好きだから」

意味不明な動機で、自ら部長に立候補したらしい。基本、数学倶楽部の人間は・・・自分にしか興味が無い。倶楽部会議で集合に興味あるという彼女以外、立候補する人も推薦される人もいなかったらしい。

「じゃ。僕、部長ね」ラッセル、ラッセル」

こうして我が聖フィロソフィー学園、数学倶楽部の部長に・・・

「集合に必要なのは・・・エレメント！

ん、何かエロい【ひ】【び】【き】！」

エロオヤジが就任したというわけだ。

人のブラをハズすのが趣味・・・そんな子が上の立場に立つなんて、
どんな混乱を招くだろう。

そう思っていた私だが・・・

現代組のラッセルちゃん。彼女こそ部長にふさわしい・・・

だんだんそう思うようになってくるから不思議。それはこの小説を
読んでもらえれば・・・みんなわかってくれるだろう。

そしてもう1つ。

後に私は・・・

このラッセルちゃんの【驚くべき事実】を知る事になる。

(第5話へ続く)

番外編？ プラジャー・パラドックス事件（後書き）

次回予告

私達3人は、【from 〇】を見つめながら議論する。

この記号、部長は円周率だといっただけど・・・？

まさか・・・？

次回 「 第5話 パイからの手紙 」

第5話 パイからの手紙（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
第5話 パイからの手紙
~~~~~

## 第5話 パイからの手紙

「やっぱり・・・ まず、コレからよね」

ラブレターを裏返す私。

【from □】

「これ・・・フロム何？ 何かの記号？」

私の質問に、2人は即答してくれた。

「はい！ デカちゃん、わかります〜！

これは円周率のパイです〜！」

「そうそう。おっばいの【□】（パイ）ね」

とりあえず部長は無視したいが・・・

「パイ？ パイって、【 $\pi$ 】じゃなかったっけ？」

「それ小文字よ。大文字で【Π】って書くの。

ピタ子・・・ホント、無理数とか苦手よね〜」

現代組の部長の知識は、犯人捜索に欠かせない。

「仕方ないでしょ！ 【古代組】では無理数、教わらないんだから〜！」

「そういえばピタ子。無理数の質問しにきた、教団の弟子・・・半殺しにしたってホント？ すっごい噂になってたよ？」

「あ！ その話！ デカちゃんのクラスでも話題なっていました」

「・・・」

「いくら自分が無理数わからないからってさ。

弟子を半殺しにするってのは・・・僕はどうかと・・・」

「あ、あれは私じゃない！ 私のとりまきが勝手に・・・

【禁忌に触れし者、制裁あれ】とか言ってたさ・・・

その子を校庭裏の川に投げ込んだのよ。

私は一切、関与してないから！」

ここで【ピタゴラス教団】について説明しておこう。いわゆる私のファンクラブで、何故か私は【教祖様】と呼ばれている。そしてファン連中は自らを【弟子】と称し、ぶっちゃけストーカー並に盲信というか、妄信するコアな連中が多い。

デカルトちゃんのファンクラブとは違い・・・私の教団は一步間違えれば、犯罪者になりそうな子ばかり。【万物は数なり】【ピタゴラスの定理】【豆禁】が教団の3大キャッチコピーになっているらしい（私は関知していない）。

弟子になって日の浅い子は・・・熱心なのはいいけど、私が苦手な無理数に関する質問をする時がある。そんな時、これまた熱心な先輩弟子が・・・質問した子を校庭裏の川に投げ込むのが慣例だ。

先にも言ったが、私は豆が大嫌い。死ぬほど嫌い。死ねばいいのに。

そんな私に、新人弟子が【納豆】を差し入れた事があった。

「僕が聞いた話じゃ、納豆差し入れた子をさ・・・半殺しどころか、全殺しにしたって聞いたわよ」

「・・・」

ノーコメント。

「豆、体にもよくて美味しいのに」。  
「デカちゃん、豆、好きだけどな」

「僕もお豆、大好き」

部長が言うと、エロにしか聞こえない。

【from □】

「<sup>はなし</sup>話を戻しましょう。じゃあ、これは・・・パイからの手紙？」

「ん・・・僕には、インターセクションに見えるな」

「インターセクション？」

「そ。2つの集合の共通部分。交わりつて事。  
僕、一昨日教えたじゃん。

ホントは【U】をひっくり返した感じなんだけど・・・」

うーん。【U】を逆さまにして【∩】か。まあ、見えなくはない。

「デカちゃん。共通部分の事、忘れたです」

「教えたばかりなのに・・・デカ子、もう忘れた？」

ここ最近、部長が講義してくれている【集合論】。一昨日は【共通部分】と【和集合】の話も出た。

例えば、

$$A \equiv \{ 2, 3, 5, 7 \}$$

$$B \equiv \{ 1, 3, 5, 7, 9 \}$$

という2つの集合があった場合、どちらの集合にも属する要素の集合を、AとBの【インターセクション共通部分】といい、 $A \cap B$ で表す。

$$A \cap B \equiv \{ 3, 5, 7 \}$$

つてわけ。ちなみにどちらかに属している要素を集めた集合は【ユニオン和集合】といい、 $A \cup B$ で表す。

$$A \cup B \equiv \{ 1, 2, 3, 5, 7, 9 \}$$

というわけだ。部長曰く、集合論で【共通部分】【和集合】は基本中の基本との事。

「インターセクションか・・・  
ルブラン君と、交わりたいてって意味じゃね？」

部長のエロトークはおいといて・・・

「顧問に聞いてみようかな？」

顧問なら部員のことをよくわかるはず。このラブレター見せたら、一発で手紙の主を特定してくれるはず。我ながらいいアイディア。早速・・・

「デカちゃん、思っんですけど」

顧問に頼るのは、多分ダメです」

ところがデカルトちゃん、私の意見にダメだしする。

「顧問のパスカルちゃんは」

学校終わったらすぐパチンコ屋行きます」

パチンコ屋？

「そつえば僕、日曜日にパスカルちゃん見たよ。

赤鉛筆耳にかけて、競馬新聞を凝視してた」

競馬？

「その新聞の裏側にさ・・・裸の女の人も載ってて興奮したわ」

ラッセル、ラッセル」

「デカちゃんの担任ですけど・・・」

そつ。数学倶楽部顧問のパスカルちゃんは、【近代組】の担任でも

ある。

「放課後」担任、見かけた事無いです」

「でも授業だけは上手よね、あの先生。

僕、確率論の授業受けた時さ・・・

わかりやすく、けっこう感動したわ」

「ええ？ デカちゃん、しょっちゅう怒られるです」。

【お前、空しいよな】【お前の哲学、浅いんだよ】って・・・」

「【古代組】の授業では、なんか変な事言ってたな」。

【結婚＝殺人】が成り立つとか・・・」

「あー！ それ、言ってた！ 僕も聞いた！」

井戸端会議になりかけたが、話を総合すると・・・どうやらは顧問はギャンブル好きらしく、授業が終わるとすぐにパチンコ屋が競馬場に向くらしい。

「ふむ。パスカルちゃんに頼る作戦は・・・ 無しね」

「無しです」！」

「ナッセル！」

なっせる？ こうして顧問経由の犯人搜索は、全会一致で否決された。

「どうやって手紙の主を見つければ・・・  
他に何か手がかりないかしら・・・？」

部長が手を挙げた。

「容疑者の人数は、有限なんだからさ。  
しらみつぶしに、部員全員あたればいいんじゃない？」

【あなた、ラブレター落としませんでした？】ってさ

自信満々で言いあげたものの・・・

「でもほとんどの部員・・・学校終わったら、散らばるのよね」

部室に顔出すのは、私達3人ぐらい。他の部員は、基本幽霊。たまに顔見せても、すぐどこか行っちゃう。

「うーん、確かに。僕達は、毎日ここ来るけど・・・  
帰宅部員を始め、他の部員がどこにいるか把握できないな」

かといって、休み時間に各クラス回るのも・・・

「【古代組】 【中世組】 【近代組】 【現代組】 【東洋組】の5クラス。  
ス。

部員は、全てのクラスに散らばってるし。

1つ1つ回るのも、けっこうめんどくさいわよ。」

「デカちゃん、めんどくさいの嫌いです」

「あ、僕もめんどくさいのダメ。はい、ナッセル！」

なっせる？

「はい！」

今度はデカルトちゃんが手を挙げる。

「はい、どうぞ」

あまり期待せずに、彼女に発言権を与えた。

「5時過ぎにポール公園行けばいいと思います」

「あ・・・」

「あ・・・」

部長と同時に声を上げる私。何故、気づかなかったんだろう？  
時計を見ると午後4時過ぎ。学校から公園までは、10分もあれば  
行ける距離だ。

「デカルトちゃん・・・ あなたの言う通りだね。  
手紙の主は・・・」

ポール公園、トイレ近くのベンチに座っているはず・・・」

「デカ子！ 冴えてるじゃん！」

「ご褒美に・・・ラッセル、ラッセル」

「きゃ〜!!」

また始まった・・・。

私は2人を部屋に残し、部屋を出ようとする。

プチン♪

「!？」

瞬間、ブラホックがハズれる感覚を味わった。

「ふふ・・・スポーツブラなんて嘘ね。僕にはお見通しさ!」

酔っぱらって気分が高揚すると、キスをしたくなるオヤジがいると聞くが・・・

「【ブラを脱ごうとしない子のブラを、強引にはぎ取る女の子】  
この命題のパラドックスに・・・ いざ、挑まん!」

部長は気分が高まると、人様のブラをハズしたくなる・・・結局エロセクハラオヤジってわけだ。

「ラッセル♪ ラッセル♪」

「ちょ・・・」

この変態のせいで・・・ 無駄な時間を過ごしたのは言ってもない。

(第6話へ続く)

## 第5話    パイからの手紙（後書き）

### 次回予告

部室を出た私。思いがけず何者かとぶつかった。

目の前にいたのは・・・部長と同じ【現代組】のソーカルちゃん。

不思議な服装の彼女は、突然意味不明な事を言ってきた。

次回 「 第6話    ソーカルちゃんと理事長 」

## 第6話 ソーカルちゃんと理事長（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

## 第6話 ソーカルちゃんと理事長

## 第6話 ソーカルちゃんと理事長

ボタン！！

「あ・・・」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかり・・・

ドスン

その場で倒れてしまった。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を見ると、ぶつかった相手も尻餅をついている。

「2分の1mVの2乗が、帰納的に分子間力によって引き裂かれ・・・」

「？」

その子の洋服には、色々な数式や化学記号がプリントされていた。

「い、ごめんなさい・・・」

前を見ず部室を出た私・・・明らかに私の不注意でぶつかったので、素直に謝るが・・・

「ユークリッド空間なら・・・カノンコードで調和がとれるけど・・・」  
もし、遠近法によるミステイクシヨンの世界なら・・・？」

その子は、ニヤニヤしながら私に語りかける。

「は？」

首をかしげる私。

「オールトの雲の中で見たわ。  
垂直落下式・・・あなたのクローズインターバルのスクイズを・・・」

「ちょ、ちょ・・・あなた、大丈夫？」

絶対、この子・・・

「エントロピーが増大すると、ジュール熱によるガンマ線の波長が・・・」

打ち所が悪かったんだ。

「おろ？ ソーカルちゃん・・・」

私に続いて、部室を出てきた部長。私がぶつかった相手に、手を差し出した。

「・・・」

その子は部長の手を握り、ゆっくりと立ち上がる。

「1/f揺らぎってあるでしょ？」

ベジタリアンの世界じゃ、ヴァンデグラフにG難度なの」

立ち上がると、ニヤニヤの視線をラッセルちゃんに向け……さらに語り始めた。

「ロンゴロンゴ文字で、コックリさんやるとさ……」

4コマ滑りのディアミドフから逆転してヒーリーを得られるから！」

「はいはい。わかった、わかった……」

ラッセルちゃんは、その子の背中を押し……

「相対性理論も、アウトオブプレイスアーティファクトも……フラクタル音階で、現在完了なの」

「ほら。【物理倶楽部】は、隣……」

隣の部屋へ押し込む。

「私……！ あなたのドッペルゲンガーを見たわ……！」

押し込まれたその子は、私を指さしてそう言った。直後……

「じゃ、また明日ね。ソーカルちゃん」

ボタン！

部長が物理倶楽部の扉を閉める。

「ふっ……」

やれやれという表情を浮かべる部長。幸いにも、その子が再び私達の前に現れることはなかった。

「ソーカル……ちゃん？」

「うん。僕と同じクラス。【現代組】のね……」

「デカちゃん、聞いた事あります」

ラッセルちゃんの後ろからひょっこり現れたデカルトちゃん。

「デカちゃんが聞いた話では、早口言葉で専門用語を言ってる。校内意見発表会で最優秀賞とったんです」。

でも授賞式で【全部嘘ぴょん】って、笑い飛ばしたって聞いてます」

「お？ デカ子、よく知ってるね」。

【ソーカル事件】って、ヤツだね」

「ソーカル……事件？」

「まあ、クラスでもかなり変な子だからさ。

あまり気にしない方がいいよ。さ、公園行こ」

【現代組】 って所は部長を始め・・・

「うん・・・」

変人の集まりらしい。

「数学倶楽部のメンバーで外へ行くのって、初めてかも。」  
デカちゃん、ドキドキです」

「お？ ドキドキしてる？ どれどれ・・・  
ちよっとブラジャーハズして、お胸を・・・」

「きゃっ」

また始まった・・・。

「これ！」

不意に男性の透き通るようなテノール声が、私達にかけられた。

「あ・・・」

物理倶楽部の前にたたずむ、スーツ姿のダンディなおじさん。少し白髪が目立つ巻き毛で、身長は推定185cmと大柄。ネクタイ姿をビシッと決めた我が聖フィロソフィー学園・・・

「サンジェルマン理事長・・・」

「・・・」

私達3人を睨み付けている。いや・・・私を睨み付けてる？

「廊下で騒がないように。部室に入るか、静かに廊下を歩きなさい」

目つきは鋭いけど、優しい口調で注意する。

「すみません・・・」

頭を下げた私。後ろの2人も、一応頭を下げている。

「仲がいいのは良いことだが・・・」

君達は今朝早くも・・・校舎の屋上ではしゃいでいたね？」

「え？」

「はわ？」

「え〜？」

私達は同時に、疑問の声をあげた。

「僕たち、朝は一緒じゃないですよ？」

「そうです。デカちゃんは今日、遅刻しました〜！」

いや・・・だからそれ、胸をはって言える事か？ しかも理事長の前で？

「そ、そうです。私達は今日、倶楽部で初めて顔を合わせました」

「・・・・・・」

理事長の眉がつりあがる。

「そうか・・・・。失礼。人違いだったようだ。

まあ、とにかく。はしゃぐ時は、場所をわきまえて」

「は、はい！ 失礼します！」

私は横にいた2人の袖を引っ張り、その場から立ち去った。

「僕たち、誰と勘違いされたんだろうね？」

「デカちゃんも気になります」

「・・・・・・」

チラッと後ろを見ると・・・・理事長が、こちらをジッと睨み付けたままだった。

「理事長・・・・」

「ロリコンかしら・・・・？」

女子高生を見つめ続けるって事は、その可能性も否定できないってわけよね？

「わ。理事長、ずっとピタ子見てるよ。」

ひょっとして、興味あるんじゃないの？」

部長が私の背中をポンと叩く。

「可能性アリです」。だからあんな作り話を言って、気を引いたんです」

「まさか・・・」

再び後ろを振り返ると・・・理事長が、物理倶楽部に入っていくのが見えた。

「・・・」

確か理事長・・・化学の先生だったはずだけど？

何故、物理

倶楽部へ？

理事長がちよっと気になりながらも・・・

私達3人は、学校を出ようと1階へ降りていった。

（第7話へ続く）

## 第6話 ソーカルちゃんと理事長（後書き）

### 次回予告

外に出ようと、1階の廊下を歩く私達。タレスちゃんやヘラクレイトスちゃん達が、万物の根源についてディスカッションしている所へ遭遇する。

### 次回 「 第6話 万物の根源<sup>アルケー</sup> 」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1365z/>

---

ピタゴラスちゃんのジレンマ

2011年12月7日02時46分発行